ひょうご水百景

No.140　黒岡川（丹波篠山市）

～篠山城の防御線・黒岡川流路の変遷（１）～

写真-1 頼尊橋から黒岡川に架かる門前橋を撮影（平成27年5月）

■ 黒岡川 流路の変遷

上の写真-1 は、丹波篠山の市街地を流れる黒岡川を頼尊橋（らいそんばし）から撮ったものです。黒岡川は、篠山城跡の東の市街地を北から南へ流れて篠山川に合流していますが、江戸時代のはじめ、篠山城築城に際し南の防御線を強化するため、小川橋（こがわばし）の下流約 70m 付近から、流れを人工的に 90 度西に変え、風深（ふうか）地先で篠山川に合流させる流路変更が行われています。

このように無理な流路変更もあってたびたび浸水被害が発生していたことから、昭和 26（1951）年に篠山川中小河川改修事業に関連して、屈曲を解消し元の川筋に戻す工事が行われました。

今回は、城の南の防御線とするために無理やり流路を曲げられた黒岡川の流路の変遷を辿ってみます。

■ 江戸時代のはじめ、大坂城包囲の一環として要害の地・笹山丘陵に築城

徳川家康は、慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いで、石田三成ら西軍に対して勝利を収めると、慶長８（1603）年に征夷大将軍となって江戸に幕府を開きます。しかし、徳川氏が完全に天下を掌握したわけではなく、大坂城には豊臣秀吉の遺児・秀頼を擁する一派が健在で、西国には毛利氏などの戦国大名や加藤氏、福島氏など豊臣家恩顧の諸大名が未だ勢力を維持していました。

家康は、豊臣家を支持する西国の諸大名たちを、軍事力と新しい政治体制によって抑え込むために、大坂城を包囲する形で近畿地方の主だった城に、信頼する武将たちを次々と配置します。

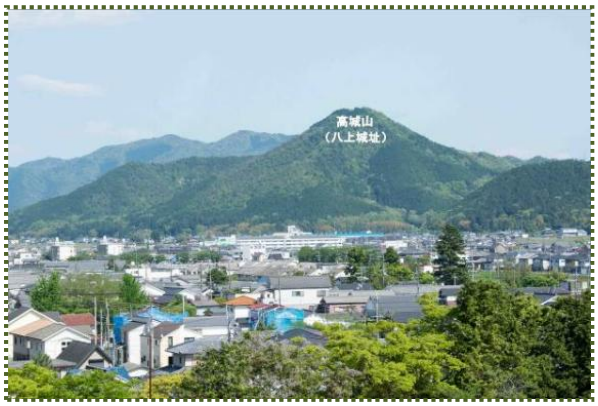

写真-2 篠山城址天守台から八上城址を望む

西への抑えとして姫路に池田輝政を配し、大坂と山陰を結ぶ要衝の地・篠山には、常陸国（現・茨城県）笠間城主・松平康重※1 を配置することに。

康重は、慶長 13（1608）年、丹波国八上藩に加増移封となり、八上城（篠山城の南東方向にあった戦国領主・波多野氏の居城）に入城します。そして、移封後間もない慶長 14（1609）年３月９日から、篠山城普請が開始されます。

家康は、縄張り奉行に築城の名手である伊勢国・津藩主の藤堂高虎※2 を、普請総奉行に播磨国・姫路藩主の池田輝政を任じ、実際に工事を行う助役大名には広島藩主・福島正則、初代長州藩主・毛利秀就、第２代土佐藩主・山内忠義ら西国 15 ヶ国の 20 家にのぼる諸大名を動員します。「天下人」家康自らが諸大名を動員し総力をあげて行う「天下普請」の狙いは、大坂城包囲網の拠点を造ることと、外様大名に夫役を負担させることで経済力を削ぐことにありました。

篠山城の縄張りを行った藤堂高虎の伝記によると、「八上ノ城地ハ要害悪シキニ依リテ是ヲ廃シ、其辺篠山ニ城ヲ築クベシノ沙汰……」とあり、周囲に防御上有効な地形的障害物があるかどうかを考慮して、篠山盆地のほぼ中央部に位置する笹山丘陵が築城地とされました。この丘陵は、北に多紀連山がそびえ、東に黒岡川、西に藤岡川、南に篠山川が流れ、自然の防御線に囲まれた要害の地であり、城の西に「飛ノ山」（権現山）、東に「王地山」という同規模の丘陵に挟まれていて、城の護りを強固なものにしています。

工事は、笹山の固い岩盤に阻まれ難航しますが、豊臣方との決戦まで日がないことに焦る家康は、高虎に早期完成を強く催促し、昼夜を分かたぬ突貫工事が行われたとか。その結果、主要工事である石垣普請が、開始からわずか半年後の慶長 14（1609）年９月中旬に完成します。その後、城建物の建築が始まりますが、天守閣や隅櫓・多聞櫓は必要ないとの家康の意向に従い、あくまで実践的な築城を最優先させ、城は二重の堀で囲み、三の丸には北・東・南の三方に馬出しが造られるなど、手厚い防御策が講じられました。

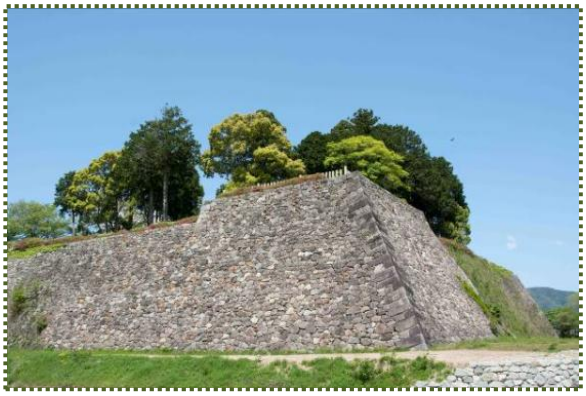

写真-3 篠山城址南東隅の天守台（天守閣は築かれず）

写真-4 大書院

写真-5 大手門付近から見た内堀

写真-6 北外堀

写真-7 東外堀

写真-8 南外堀

写真-9 西外堀

写真-10 監物橋から篠山川を撮影

城と同様、城下町も防御に徹してつくられています。城下を通る街道は、敵の侵入を阻止するためカギ型やＴ字型に曲げ、さらに、城下の出入口には寺院を配置し、寺院に砦としての機能を持たせました。武士や足軽の屋敷についても、その身分によって居住区域を分け、藩主の住む本丸を護るよう重層的に配置しています。

城は工事開始からおよそ９ヶ月後の慶長 14（1609）年 12 月 16 日にほぼ完成し、松平康重が初代城主として入城します。

※1 松平康重：駿河国三枚橋（さんまいばし）城主・松平康親の長男。天正 11（1583）年３月 16 日の元服の際に家康から「康」の偏諱（へんき：貴人などの二字名の中の一方の字）を授かり康次、後に康重と改めた。康重は徳川家康の落胤（らくいん）とする説があり、生母は家康の侍女で、家康の子を身籠ったまま康親に嫁いだとされる。元和５（1619）年、大坂平野南方の要衝、和泉岸和田に移封となる。

※2 藤堂高虎：戦国時代から江戸時代初期にかけての武将・大名。伊予今治藩主、後に伊勢津藩の初代藩主となる。築城技術に長け、宇和島城・今治城・篠山城・津城・伊賀上野城・膳所城・二条城などを築城し、黒田孝高、加藤清正とともに三大築城名人として知られる。高虎の築城は、石垣を高く積み上げることと堀の設計に特徴があり、石垣の反りを重視する加藤清正と対比される。

■ そこまでやるか、四重の防御線

図-1 の「丹波笹山城之絵図」（国立公文書館所蔵）は、正保年間（1644～48）に描かれたもので、篠山城を伝える絵図の中で最も古い時期のものだそうです。

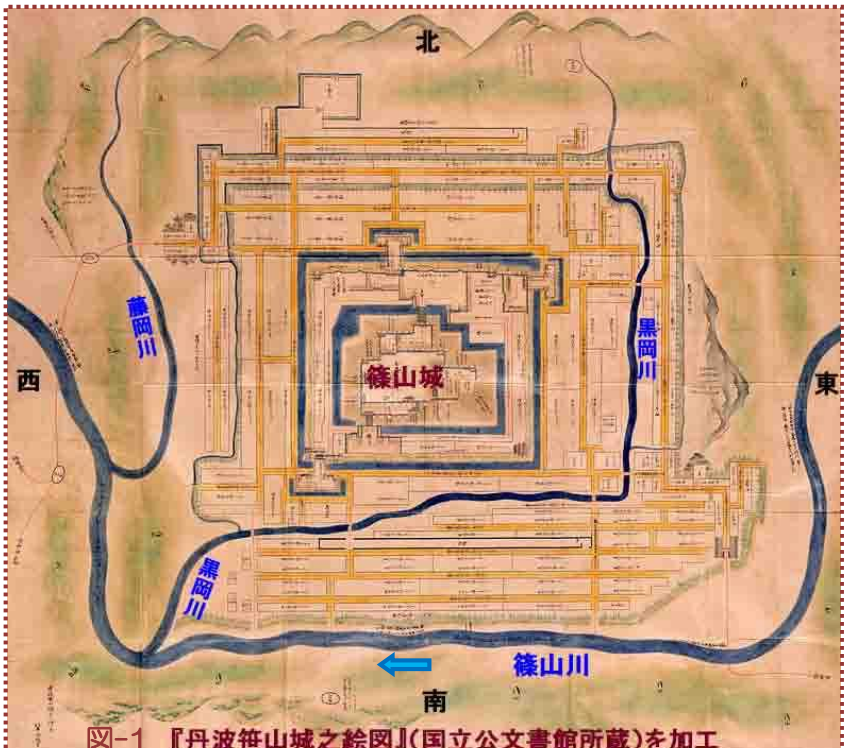

図-1 『丹波笹山城之絵図』（国立公文書館所蔵）を加工

篠山城の防御線は、内堀、外堀とその周辺を流れる川です。普通に考えれば、これで十分な防御線が確保できたと思うところですが、そうではなかったようです。城の東と西を流れる篠山川を考慮に入れると、東と西は四重の防御線ですが南側だけは三重だったので、城の東側を北から南へほぼまっすぐに流れていた黒岡川を、小川橋の南約 70m の所で西へ直角に曲げて流路を変更し、南外堀に沿うように西向きに流し、風深地先で篠山川に合流させました。

これで、北は多紀連山を背にして、東、西、南の３方向は四重の防御線が出来上がりました。石橋を叩いても渡らない家康の指示だったのでしょうか。

黒岡川の直角に曲げられた箇所の石積護岸は、きわめて堅固に造られていて、三百数十年間、あらゆる出水に耐えてきたとか。

■ 篠山城外堀の水は黒岡川から導水

篠山城周辺の地形は北に高く南に低いので城を囲む外堀の水面を一定にできません。そこで、堀は土堤を設けることで、北外堀、東外堀、西外堀、南外堀の４つに区切られていて、南へ行くほど水面は低くなっています。特に、北外堀と東外堀の落差は大きく、約 3m もあるそうです。

外堀の水は、以下に示す黒岡川の２ヶ所から導水しています。

① 井屋井堰から導水

県道本郷東浜谷線の北にある井屋井堰で取水し、北外堀の東隅に注水している。（図-2 および写真-12 参照）

② 東新町から取水

現在は川端橋（かわんちょばし）上流付近からポンプ取水し、途中の田畑を潤しながら南外堀へ導水しているが、昔は約 50m 上流に土俵積の取水堰があった。増水のたびに井堰が壊れることから、県・町（現・丹波篠山市）で協議のうえ現在の位置でのポンプ取水となった。

導水された水は、まず北外堀に入り、東外堀や西外堀を経て南外堀に入り、そこから南門馬出堀を経て旧黒岡川に排水され、風深地先で篠山川に流れ込みます。

また、内堀には導水施設がなく、城内に降った雨水を貯留するようになっています。

図-2 篠山城周辺の地図

■ 河川浄化事業により藤岡川からも外堀に注水

外堀の水は、黒岡川からの導水だけでは十分な入れ替えができず、水質が好ましい状況ではありませんでした。そのため、平成６（1994）年度に着手した篠山川河川環境整備事業（河川浄化事業）により、藤岡川からも浄化用水を導水しています。外堀の水質を改善することによって篠山川の水質改善を図る、というのが河川浄化事業採択の表向きの理由ではありますが、その頃、篠山川自体はそれほど水質が悪かったわけではなく、実のところは外堀の水質改善が狙いだったようです。

導水の水源として選定したのは藤岡川です。熊谷大橋の上流にある大槻井堰（写真-11）から４系統の既設用水路が篠山城跡近くまで伸びてきていますが、その用水路にバルブを設けて取水し、市道大手線などの地下に導水管を埋設し、大手門跡近くの西外堀に注水しています。また、ポンプにより東外堀にも注水できるようになっています。

なお、事業化に関連して、平成 10（1998）年２月６日に旧黒岡川から篠山城外堀までを「篠山城川」として準用河川に指定、さらに平成 14（2002）年 10 月７日に導水路部まで延伸指定されています。

写真-11 藤岡川・大槻井堰

写真-12 黒岡川・井屋井堰

■ 南外堀では「ハス」復活に向けた取り組みが進められている

南外堀がある所は、築城前「白鯰（しろなまず）の坪」と呼ばれる古池で、平成 18（2006）年頃まではハスで一面覆われていたそうですが、堀に生息するミドリガメ（別名ミシシッピアカミミガメ）の食害により消滅したそうです。ミドリガメは、日本生態学会により日本の侵略的外来種ワースト 100 に指定されています。

丹波篠山市では、平成 25（2013）年からハスを復活させようと「南堀ハス再生プロジェクト」の取組みが始まります。南外堀の水を抜く「池干し」を行い、ミドリガメの駆除に本格的に取り組むとともに、ミドリガメ一掃後に蓮根の移植が行われたことで写真-13 のように南外堀にハスが復活しつつあります。

写真-13 南外堀に復活しつつあるハス

■ モノローグ

大坂と山陰を結ぶ要衝の地とはいえ、黒岡川を直角に曲げてまで四重の防御線を築く必要があったのでしょうか。結果的に防御線が効果を発揮することはなく、浸水被害だけがその後繰り返されることになりました。

黒岡川は人家が連担していて河積の拡大は難しかったと思いますが、篠山城の外堀に調整池の機能を持たせることはできなかったのでしょうか（江戸時代の話）。

【参考資料】

1 『篠山町七十五年史』 篠山町役場　昭和 30 年３月
2 『篠山城物語』 丹波篠山市 HP
3 『篠山川導水ルート調査業務報告書』 柏原土木事務所　平成９年３月
4 『篠山川河川環境整備事業（浄化）報告書』 柏原土木事務所　平成８年３月
5 『松平康重、藤堂高虎、ハス』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

ハス（蓮）

インド原産のハス科多年性水生植物。日本での古名「はちす」は、花托の形状を蜂の巣に見立てたとするのが通説で、「はす」はその転訛。水芙蓉（すいふよう、みずふよう）、もしくは単に芙蓉、不語仙（ふごせん）、池見草（いけみぐさ）、水の花などの異称をもつ。花期は 7～8 月で白またはピンク色の花を咲かせる。早朝に咲き昼には閉じる。地下茎はレンコン（蓮根）として食用になる。

写真-14 ハス

※発刊：令和４（2022）年１月 『ひょうご水百景』No.140
改訂：令和８（2026）年４月 『ひょうご水百景』No.140